

ます。これは前々から常に思つてゐました。たゞ公私とも常に身に背負ひ切れぬほどの仕事を、自ら求めて持つて居る自分の不明を悲み、本誌に對しても、微力な自分の許すだけの力は賤いで参つたことを申して、御詫びを申し上げます、卒業生の義務的援助として、會費を正しく送附すること、價値ある研究報告などを投稿すること、これ等も全賛助員ども、誠に不十分であると、常に遺憾に思つて居ります。そしてそれが學校の側面史の一部として、卒業生のある一斷面の現状をよくあらはして居ることも、お互に深く考へねばならぬこと、思ひます。

「卒業して二三年も経つて御覽なさい」とは、卒業間近き頃、さる先生から、思想の内容の變化に就いての暗示として承つた御言葉であります。今も、初號を開いて見ますと、それから想起しました在校當時の精神生活と、今のそれとが比べられて、まことに無量の感があります。もとより粗野な精錬されないものではありましたが、實に彈力に富んだ活潑な理想的な思想に満たされて居た人々なのでした。今では、そのイラストレイクな、ヴァクタルな、アイ

氣がついて見ると、御たづねの事に、御答へしなければならぬ日は、今日でございました。すいぶん申わけのない事をしてしまつたものでございます。けれど地方に居て、心身の勞役に従つてゐる私達には、かういふ事に對して、かういふ結果を來すのが普通の事になつて居ります。まったく私達は一學期に一度文科會雜誌を頂きますと、ふと、世の中にかういふものが存在してゐたといふ事を思い起すといふやうな、生活をしてゐるのでございます。

これ位餘裕なく暮してゐる私達、これ位忘れっぽい私達がいく年も前の、而も感想といふやうなものを、憶えてゐるわけがございません。強いて申せば其の當時、私には此の雜誌の創刊されるわけがわかりませんでした、此の雜誌の帯びる使命といふやうなもの、わからなかつたのでございます。どういふ特色をもつて發展してゆくものか、其れも遂にわかりませんでした。其れ等に對する不満が、やがて此の

デアリステイックな思想が、もつと勉強しなくてはといふ一念をます／＼固くさせながらも、讀書にさへもます／＼遠ざからせるやうに、余儀なくさせられて居ます。その思想は今では丁度地殻に固くつゝ、まれた熔岩のやうに、心の中にたゞ高度の熱を保ち乍ら逼息して居る有様となつて居ます。當初の同人たちが皆さうなのです。私は、おとなとして、無限の未來を持つたをさな兒を祝福し、彼等をして出来るだけ樂しませ、できる丈け遊ばせてやりたいと思ふと同じ心に、在校の方々がその學生時代を、十分に生甲斐があると思ふ精神生活をなさるやうにと祈つて居ます。と同時に眞面目な學習を怠つて下さいますな、確實な學習が何よりもよい人格をつくり出すといふことも申し上げたいのであります。そして此の様な繰り言めいたことを言はないですむ元氣な方々によつて永久に經營せらるべき文科會誌の前途を祝福するのであります。

回顧はまた、私の持ち前の主觀の強い文になつてしまひました、悪しからず。(大三二、一一、一六)

雜誌が創刊された當時の感想であつたと思ひます。其の他には、今更らに、私達の力の貧弱なものであることなどをしみ／＼思はせられたなどいふことでございます。

記念號などいへば御目出度いことでも申あげねばならぬのかもしれないけれど、とにかく、つむじのまがつた、御目出度くはおさまりきれぬ私の申あげることとはこんなとでございます。(稻葉 光)

四年前

昔の一年生

□氣がついて見るといつの間にか四年は過ぎて居たそして最後の試験もすんで了つた。毎年々々みんながかうした悲しみに打たれて現實界に入つてゆくといふ事が身に喰ひ入る様にしみ／＼と感ぜられる。そして四年前が夢の様になつかしく柔らかに追つて来る。

□それは櫻が花やかに咲いた春の日であつた、お茶の水の第一印象、美しく輝く花を見て夕日を見て若

私の胸には讚美の光が希望の光がみち／＼て居た世はすべて私達の爲に光つて居る様に思はれた。

□五の側(今の花の寮)の二階には白い塵と一緒に揚貴妃櫻の紅の花片が一杯にしかれて居る。寢台がお部屋一杯に詰まつて雪白の敷布でおほはれて居たお部屋の入口には奇麗な手蹟で十六人の名札がかゝて居た。

新入生は室長や其他に導かれてぐる／＼舎内を巡る、さうした一團が長い廊下の方々で出遇つて、上級の人達は親しげな微笑を交すのを新入生は畏つて眺める。

夕方になるとお床をのべる、室長が丁寧な毛布や蒲團の敷方を教へて下さる。寢台第一夜の印象は涙であつた、父母がなつかしい、家戀ひしいのきれいな純な涙であつた。けれど何時の間にかう／＼して心配して起床の鐘が鳴る少し前、白い窓かけを洩れる朝の光を仰いだのであつた。

□馴れない寢台で蒲團を落す事は何より苦痛であつた。

一年生はよく紐でもつて水引をかけた様に蒲團を結

んだ、それでも意地悪く翌朝にはずれて居る。

□お部屋の人の親切が身にしみる程嬉しかつた、室長は母の様によく世話を下さる、「何々さん」と呼ぶ事が耻しい位大人らしく見えた。

□黙學終りの鐘が鳴つて自習室を出る気分、うす暗い廊下を夢心地に歩く時、講堂と舊校舎との間の空に月が薄やかにさして居る時、何ともいへないロマティックな気分が打たれる。お部屋は沈黙と暗黒とにござされて私達の歸るのを待つて居る、灯がつく、俄に周囲の空氣は花やかになる。此頃「おまわり」といふ事があつた、消燈の鐘がなると生徒監が下婢をつれて提灯をさげてお廻りになるのである。一ノ側二ノ側(今の菊、梅寮)と順にお廻りになるのを稱して順行、六ノ側(月寮)からのものを逆行といふ、「お立ち番」といふのが一人宛あつて部屋の入口に立つて「お休み遊せ」をいふ。其のいらつしやるまでが一日中に一番楽しい時なのである。如何にも若い人らしいお部屋らしい気分が味はれる。馴れないお立ち番は頻りに心配する。

「二ノ側の灯を見てらつしやい。あの灯が消えるぞ直

きいらつしやるんですよ」

かういつて上級の人は教へて呉れる。廊下の窓に頬をすりつけて木の葉が茂る二ノ側の灯をまたきもせずに眺めてゐる。逆行の時にはよく失敗が演ぜられる。

□自習室も今から考へると一種のなつかしさが浮ぶあの大きな講堂一杯に机がギッシリ並べられて小さな電燈が酸漿の様になら下つてゐる。最も親しい最嚴肅な場所なのである。こゝに入つてはお話は無用自習時間になれば淋しい位ひっそりする、私はあの自習室の気分が何となしに好きであつた。稀に「御勉強中失禮」がある、これは大抵自習室長が特別な用事を傳へるのである。郊遊會があるといふ五六日前、各級の引率先生が發表せられるのもこれである。熱烈な興味を以て迎へられたる、拍手がわき起る。

□藤棚はまた私達にとつてなつかしいものである。故郷からの消息を抱いて泣くのもこゝである、朝など英語の單語を暗記しながら幼稚園の窓から緩やかなビヤノの洩れるのを聞いて何かなし異國を慕ふのもこゝである。紫の房長い花がだん／＼に散つて了

つて試験が近づく頃になるとあの茂つた葉が刈り落される、そして青い實がちら／＼見える。「この實が尺近くなればうちに歸れるのですよ」とかういつて上級の人々は慰めて呉れる。

□夕方はニコライの鐘がなる、夕御飯をすまして外に出ると太い底力のある嚴肅な響の中に絹糸のもつれた様なデリケートな響を秘めてニコライの鐘がなる、その音のハーモニーが妙に悲しく響いて一年生は家を戀しがつてよく泣く。

「此間ねあの鐘を聞きながら家の方に向いて泣いてたんですよ、そしたら方角が違つてあべこべの方に向いてたんですよ」

無邪氣な告白をして詰まらなさうに笑つてる人もある。

□私達は過後期にこゝに入つた人間なので昔の自習室制度は一學期限りであつた。入學當初に感じたことでもなつかしく記憶してゐるものを二つ三つ書きつけて見た。卒業式の頃を少しかいて筆をおかうと思ふ。

□三學期の試験が終つて了ふと急に春が來た様に思

はれる。これから愈送別會の用意にかゝるのである。三年は送別會について斡旋する、二年が主になつて寄宿舎内の飾付をする。どんな趣向で送別の日を花やかに飾らうかといふ事に苦心する、議定つて一年は其の助手として一生懸命に働く。各寮は秘密の中に着々と事を運んでゆく。

□此準備の最中に火事の練習が行はれた、一つ宛風呂敷包を持つて白張を立て、廣場に集つた時は只寒いと感じた丈であつた。

□卒業式近くなると舊御部屋會、舊々御部屋會舊々々御部屋會など、いつて上級の人達で食堂が賑ふ、一年生だけがつまらなく淋しい。上野の鐘が身にしみて鳴る。

□卒業式の朝はお祝ひのしるしとあつて赤い毛布で寢臺の上に海老を作る事が例になつてゐる、おいしさうな海老もあるし、尾の曲つた不器用なものもある。「一年生は一日海老の中に入つて居なくつちやならないのですよ」

二年あたりの人が頻りにかつぐのである。そして田舎出のぼつとした私の様なものはうま〜と釣られ

て余程近來は進歩して來た様に思はれる。尙色々かくあり度いと思ふ事も多いが此會誌の性質上その編輯其他の事は凡て生徒がするといふ事にした。外の人を頼む事は其の動機も違ふから存在の意義が別になる。よく出來ても出來なくても生徒がするといふ事を忘れない様にした。一方卒業生からの寄書もあつて教師としての生活なり其の地方、學校の状況を知つて他日教職を奉ずる時の参考心得になる記事も澤山あつていゝと思ふ。談話會が時々あつて他所の人を呼んで來て其の話を聞くのもいゝが其筆記を載せる様な事は寧ろ雜誌としては第二次的の事であらう、之が爲に多くの誌面を捧げる必要もない。紙面の大小も大切な問題ではない。少ければ少いままを出す。つまり此雜誌としての立場から集められるものだけを集めて出せばよいのである。

一体に文科的材料の多いのは當然の事で歴史地理文章詩歌もあるだらう。しかしこの文科は教育といふ事を常に考へねばならぬ。廣い意味で教育に関する研究、時には教授法に關する事も出ていゝ。純文學雜誌となつてはいけないのである。教育上の

て了ふ。

□また其朝は卒業生の方がお化粧をなさるので。「依田(湯番)がピンと上下をきてねお湯をもつてゆくんですよ、だから暗い中に起きて見に行きませうね」と誠しやかにいふのも多く二年の人。そして依田の上下姿はかつて開關以來誰も見たことがないのである。

何年かの間繰返された傳説がだん〜亡びて了ふ、そして日毎に新しくなつてゆく、それが文明の進歩なのであらう、けれども亡びゆくものを惜しむ氣持、夢の様な傳説をなつかしむ氣持から脱する事が出來ないで私はかうして新舊の間をさまよつてゐる。

(大正三、一〇、二九)

批評

第十號に際して 下田 次郎

一日幹事は教育教習室に伺つて文科會誌創刊者としての先生に御話を願ひました。文責は全部記者にあるのでございませう。

文科會誌も愈十號に達したといふ事は先づ以てお目度い次第である。代々の部長や委員の盡力によつ

事は文學的に取扱はれないといふ事もない。文學的趣味を教育で論ずる事も出來るのである。題目も教育に亘つた事かあつて欲しい學校生活の記載も結構である。記憶は案外あてにならぬものである。其生活の實際を各人の筆で感じたまま有つたままに書いておくといふ事は他日の思出となつて記憶以上にいき〜として當時を思浮べる事が出來る、即裏面の學校生活史ともいふべきものである。故にかういふ方面も今少しあつていゝと思ふ。讀んだ本の内容を紹介し其批評をするのもよからう。又圖書室に來る文科的新刊書の紹介をする事は地方に居る人には有益だと思ふ。又望み難い事かもしれないが少しは英文欄もあつて作文として出すものでなければ讀んだ書物中のよい一節を出して其の解説をするとか味つた所を主觀的に述べる事もよからう。尙雜誌は文科の研究の案内ともなる様にならばよからうと思ふ。此雜誌を見れば研究する上に色々指示される事もあり暗示をうける事もあり内外の人に係らず研究するに此雜誌を見て都合がいゝ様になつたらいい事だらう。